

1P 暑さ寒さも彼岸までとい
います。まだまだ日中は
暑さが厳しい今日この頃で
すが、皆さんいかがお過ご
してでしょうか。

早速秋のビッグニュース
ですが、かつて北道場でい
つしよに稽古や道場運営を
軌道に乗せていくことなど
に汗を流した衛藤ご夫妻が
豪州から帰国しました。

早速メールで連絡を取り
合い、近々帰国報告会を兼
ねた懇親会を住吉町あたり
でセツトしたいと考えてお
ります。お楽しみに！

さてこの「岩屋通信」も
おかげでようやく十号まで
到達しました。これもひと
えに道場の皆さんの熱心な
講読のお陰と感謝しており
ます。

最近では、インターネッ
トなど便利な情報化社会と

なり当道場のホームページ
で読んだ方が感想をメール
してきたりと思わぬ副産物
効果も出てきました。

思えば前述の衛藤さんが
創刊者ですが、これからも
まずは五十号を目指して二
カ月に一回の発刊を目指し
ていきます。

といっても、紙面のほと
んどは浜田道場長の日頃か
らの合気万生道に寄せる熱
意の原稿ですが・・・

と、いうことで今回もま
ずは去る九月二日に本部で
開催された有段者交流研修
会（宿泊あり）に関する道
場長の寄稿から。

「有段者交流研修会」
九月二日土曜日午後三
時に熊本公徳会において、
第三七一 回有段者交流研
修会が行われる。

九月の研修会は例年宿
泊合宿ということで、研修
会終了後は懇親会が行わ

れ道場相互の親睦が図ら
れている。

長崎北道場からは、浜田、
市川、田中の三名で参加す
る。午後二時過ぎ頃に公徳
会に着くと、既に多数の参
加者である。

道着に着替えると、「準
備体操は各自で行うよう
に。」と濱田師範長から指
示があり、各々で準備体操
を行い、続いて砂泊先生が
入場され、礼拝を行う。

砂泊先生が「今日は先般
亡くなられた重富道場の
永井道場長の奥様が来ら
れております。黙祷をして、
その後、永井道場長の奥様
から挨拶があります。」と
の話があり、全員が砂泊先
生の合図で黙祷を行なつ
た。

黙祷の後に故永井道場
長の奥様が「主人は生前中
には大変お世話になりました。
そして葬儀に際して
はありがとうございました

た。皆様もどうぞ体を大切
にして合気道を永く続け
てください。」という御礼
の挨拶を述べられ、非常に
胸をうたれた。

その後、通常の研修会に
入り、体捌、二人掛の呼吸
力、あや取り四か条、あや
取り呼吸力、両手両取りの
呼吸力をして、研修会は一
時間程で終了となり、その
後午後六時からメルパル
ク熊本での懇親会に。

二時間に及んだ懇親会
は、道場相互の親睦も大い
に図られ、また、後半は先
生がハーモニカを披露さ
れ和やかなうちに閉会し
た。

今回の研修会で印象だ
ったのは、先生がいつも話
されていることであるが
「体技は行き詰る。植芝先
生の精神が技となつて表
現されなければならぬ。
体捌は常に捌く方が『どう
ぞおいでください』という

気を出していなければなら
ず、相手が突いてきてか
らではもう遅い。」等と言
われたことである。

そして、強い人には本当
に力を完全に抜けていな
いと崩れないということ
を、他の道場の高段者と稽
古している時に感じ、力を
抜くことを真剣に研究し
なければならぬとあら
ためて思った。

去る七月二二日、熊本城
北道場の本多先生が故郷
の長崎への里帰りを兼ね
て当道場へ来られました。
稽古の後、本多先生を囲
んで大いに懇親を深める
ことができました。



「本物について」*前号
よりの続き

鉄腕アトムにしる、若者の考え方相違にしる、その根本にあるのは、何であるかを知らなければ、ちょうど糸が切れた風になっ

てしまう。そして、本物にもせものも区別がつかなくなり、しまいにはにせものに支配され、人生を誤った方向へと展開するであろう。

砂泊先生は、「プロとは決して人よりも優れているということではなく、自分の実力で飯を食っていくことができるものである。」ということを以前言われていた。

そして我々は、砂泊先生の教や動きそのすべてを本物であると実感し、合気道を続けている。

何故、本物であると実感するのかというと、先生の腕をとった感触もさるこ

とながら、教そのものが純粹であり、濁ったところがなく、それはちょうど、清みきった湖のごとく清らかであるからこそであり、また、それによって、自己の気持ちも浄化されるからである。

それはまさに素人ばなれした状態と教えであり、なんの濁りもない。実に本物であり、我々はこの本物と接触するだけでも、意義あることである。

「本物」と「にせもの」については、それぞれの個人の価値観によって選択の自由はあるが、「どうせみるなら」、「するなら」本物と接触をしたいものである。また、そうした区別ができるように自己の能力も高めていかなければならない。

その高め方は、勉強が一番であり、また、そうした師といかに多く接触する

かである。

幸いにして、砂泊先生という本物に接触しているが、先生の合気道ができるだけ多く吸収し、時代がどのように変化しようとも対応して行きたいものである。(平成十七年三月三日)

さて、久しぶりに筆者の旅シリーズを掲載させていただきます。

去る七月二十九日土曜日の午後八時前、昭和町のバス停から名古屋行き夜行バスに乗車。

日頃から寝つきがいいほうではないが、休みとなると気分もゆつくりとなるせいか、最近の高速バスのシートはかなり後ろに倒せることもありクレーンが効いた車内は快適である。

これから一週間、五年に一回の職場のリフレッシュ休暇制度を活用しての

旅であり、目的は浜松で学生生活を過ごす長男に会うことと、高山植物が今盛り草津・日光岡白根山に登ることである。

翌日朝、定刻どおり名古屋駅前到着、喫茶店で軽く朝食を取り、飛騨高山行きの特急列車に乗車。だんだん川沿いに高山本線を北上していくとあちこちの斜面にツメ跡が。しかし幸いにもニュースでは今日中部地方も梅雨明けしたとが。

約二時間、車中からの飛騨川沿いの景色を楽しんでいたらあつという間に高山の駅に到着した。

高山の町並みは江戸時代初期に金森長近が京都に似せて碁盤の目のような区割りで完成させており、そこかしこに昔の風情が漂う。このまちはまた明治のはじめに飛騨の郡知

事に任命された父に付いてきて幼少期の十歳から十七歳までの多感な時期を小野鉄太郎のちの山岡鉄舟が過ごした所としても知られている。

ついにながら約三十年近く前、筆者が新婚旅行で訪れたところであることを述べないとこの少旅行誌はあとが繋がっていないだろう。以前よりも街中はきれいになっていて、観光客も増えているが、それは観光施設付近のことであり、商店街はシャッターが閉まり少しさびしい感じである*以下、次号をお楽しみ



高山の町並み